クロッシュ・ブレイズ

ヴェロニカの嵐

茅田砂胡
Sunako Kayata

NOVELS Fantasia

立ち読み専用

口絵
挿画　鈴木理華
DTP　ハンズ・ミケ

1

「それでは、これより審議を始めます」
裁判を開始する時のような厳かな宣言だった。
実際、宣言をした委員長も、その場所も、小さな法廷のような雰囲気だった。
正面の一段高くなったところには委員長が座し、左手に五人ずつの委員が並んでいる。
手前の傍聴席には二十人ほどが座っている。
「当人権審議委員会は連邦大学の定める人権擁護の精神に基づき、真実を明らかにする審判であります。犯罪を裁く場ではないことをご了承ください」
傍聴席の大人たちが一斉に頷いた。
「被告は――訴えられた人は前に出てください」
裁判ではないとは言うものの、原告、被告という裁判用語を用いている。
ただし、相手は子どもなので、委員長はこういう言い方をしたのだろう。
弁護人に促されて進み出たのは、リィだった。
幼いながらも人を圧倒する美貌と、煌めく金髪に、傍聴席の眼は釘付けになっている。
傍聴席にはリィの父親のヴァレンタイン卿もいた。
ルウもいた。
二人とも心配そうに、それでいて食い入るようにリィの姿を見つめている。
よくよく注意してみないと気づかないくらいだが、リィは軽く足を引いていた。
そのせいか、いつもよりゆったりした足取りで、原告・被告を含めて発言者が座る席に腰を下ろした。
それを見届けてから委員長は問いかけた。
「あなたのお名前は？」
「ヴィッキー・ヴァレンタイン」
「それは通称ですね。正式なお名前をどうぞ」

リィは答えなかった。
普通の裁判ならこんな態度は当然許されないが、この審判は委員長が言うように罪を裁く場ではない。
わかってはいても手元の書類をわざわざ確認して、委員長はもう一度問いかけた。
「エドワード・ヴィクトリアス・ヴァレンタイン。そうですね？」
「はい」
顔をしかめながらも、リィは素直に答えた。
答えはなるべく『はい』か『いいえ』で済ませるようにと弁護人に言われていたからである。
「あなたにはチャールズ・レザロより、人権侵害の訴えがなされています。――知っていますね」
「はい」
「その事実を認めますか？」
「いいえ」
委員長は心持ち身を乗り出すと、真剣な面持ちであらためて問いかけた。
「あなたは、チャールズ・レザロの訴えは事実ではないと主張するのですか」
「はい」
「では、実際に何があったのか、話してください」
リィはちょっと言葉に詰まった。
そのためにはどう考えても『はい』と『いいえ』以外の言葉を使わなければならない。
だが、自分の話し言葉を聞いた弁護人はほとんど絶望的な表情で『きみはできるだけしゃべるな』と釘を刺してきたのである。
どうしたものかとリィは思案したが、その沈黙を委員長は違う意味に取ったらしい。
「言えないのですか？」
「いいえ」
棒読みに言った後、リィは皮肉に笑って委員長を見つめ返した。
「おれにはちゃんと舌がある。何もかも全部話せる。ただし、おれ自身の言葉で話してもいいのならだ」

大胆不敵なその口調に、案の定、傍聴席の大人の間からは驚きのざわめきが洩(も)れた。
だが、委員長は真顔で頷いたのである。
「ミスタ・ヴァレンタイン。我々にはまさにそれが必要なのです。――話してください」
「どこから？」
「最初からです」

2

絶好の旅行日和だった。
とはいっても、目的地の惑星は連邦大学惑星（ティラ・ボーン）から何百光年も離れている。
出発地の天気がよくてもあまり関係はないのだが、そこは気分の問題だ。
二泊三日の小旅行なので、リィもシェラも軽装で、必要最低限の荷物しか持っていなかった。
宇宙港の集合場所に向かいながら、シェラは深い吐息を洩らしている。
「……本当にいいのでしょうか？」
「何が？」
「クレイドの時もそうでしたけど、勉強というより、遊びに行くような気がするものですから……」

連邦大学中等部は体験学習に力を入れている。
教室の中で机に向かってする学問よりも、自然や社会の中に出向いて経験を積むことを重んじている。
その体験学習にも色々な種類がある。福祉施設に出向いての奉仕活動、工場などの生産現場で実際に製品を組み上げる、宇宙船内で船員体験をしたりと、実に豊富な項目が揃（そろ）っている。
おもしろいのは、どの体験学習に参加するのかは生徒に任されていることだ。
今回、二人が選択したのは林間学校だった。
人里離れた山中で自炊生活を行うというものだ。
クレイドには大人たちがいて手助けしてくれたが、今回は基本的に自分たちでやらなければならない。
しかし、自炊といっても、そこには水道があり、ちゃんとした山小屋に寝泊まりする。食材も用意のものが提供され、調理器具も完備しているという。
これではリィとシェラにとっては、本当に遊びに行くのと変わらない。

「これで単位を取ったことになるのでしょうか？」
シェラはひたすらその点を気にしていた。
「学校側がそれで勉強になるって言ってるんだから、いいんじゃないのか？」
「はあ……」
「そんな難しい顔をしないで楽しむことにしよう。おれたちにとってはありがたい話でもある」
「それは確かに」
たいていの体験学習は、それが行われる最低出発保証人数と最大参加人数というものが決まっている。
旅行会社が企画するパッケージ・ツアーのようなものである。
今回の最低出発保証人数は二人だった。つまり、希望者が二人いなければ行われないということだ。
参加者の顔ぶれが出発当日までわからないのも、ツアーさながらである。
だが、今回は、意外にも集合場所には知った顔がずいぶんいた。
「何だよ、二人とも。これに参加するのか？」
眼を丸くして言ったのは、二人と同じフォンダム寮生のジェームス・マクスウェルである。
ジェームスとリィたちは昨夜も寮の食堂で一緒に食事にしたのに、今日この場で顔を合わせることになるとは思っても見なかった。
「そんなこと一言も言わなかったじゃないか」
ジェームスは盛大に不満を訴えてきたが、リィも負けじと言い返した。
「お互い様だろう。そっちだって言わなかったぞ」
この時期、生徒はほとんど毎日のように何らかの体験学習に出発している。
特に話題にならなくても不思議ではない。
「珍しいな。同じ体験学習にフォンダム寮生が四人集まるなんて」
笑いながら言ったのは他ならぬフォンダム寮長のハンス・スタンセンだ。
ハンスはこの二人がただのきれいな少年たちでは

ないことをよく知っているので、真面目に言った。
「きみたちが一緒なら心強いよ」
「本当にね。でも忘れないで。アイクライン校生も四人よ」
悪戯っぽい声で口を挟んできたのはアイクライン最上級生のファビエンヌ・デニングである。
同じフォンダム寮でもハンスはアルサチアン校、ジェームスはヴェルナール校だ。
もう一人のアイクライン校生はやはり最上級生のフランク・ダックスという男子生徒である。
フランクは長身の、気の強そうな眼をした少年で、リィとシェラを見ると、露骨に馬鹿にした顔つきで言ったものだ。
「おまえたちにキャンプなんかできるのかよ？」
「そっちこそ、今日は腰巾着を連れてないんだな。一人で大丈夫なのか」
「何だと⁉」
「フランク！　よしなさいよ」
ファビエンヌが顔をしかめて同級生を注意すれば、シェラも小声でリィをたしなめた。
「リィ。短い間とはいえ共同生活をするんですから、仲良くしなくては……」
「向こうが一方的におれを敵視してるんだぞ。まあ、揉め事は起こさないように気をつけるよ」
「そう願います」
シェラはちょっと笑った。
ずっと少女として育ってきたシェラには同年代の少年と衝突した経験がない。
当然、無闇に誰かに突っかかる少年の心理もよく理解できない。
だが、フランクがリィに反発するのは、何となくわかるような気がした。
自分のほうが遥かに年上なのに、力も強いのに、リィはちっとも自分を恐れない。敬おうともしない。
それが気にくわないのだろう。
集合場所に集まったのは少年少女が十二人。

他の六人は初めて見る顔で、十四、五歳に見える女の子が四人、その子たちと同い年くらいの少年が一人、小学生くらいに見える男の子が一人である。

この体験学習の対象者は中高生に限られるから、小さく見えても中学生にはなっているはずだった。

女の子たちはみんな顔見知りらしい。楽しそうにおしゃべりしていたが、突然現れた金銀天使を見て、ほとんどの子がぽかんと眼を見張った。

ただ一人、ぶつぶつ文句を言っている少女がいた。

「最低でも六種類は課外授業の単位を取得しなきゃ進級できないなんて……冗談じゃないわよね」

「しょうがないよ。規則なんだから」

他の少女が苦笑しながら、その子をなだめている。

予定の時間になると、彼らの元に添乗員の徽章を付けた男がやってきた。

三十代の前半くらいか、せかせかした足取りの、愛想のいい人物だった。

「はい、全員揃っていますね。目的地まで皆さんと同行するカーターです。よろしくお願いします」

自己紹介と同時に人数が揃っていることを確認し、カーターはさっそく切り出した。

「今回の体験学習の参加者はここにいる十二人です。それでは皆さん、簡単に自己紹介してください」

「あたしはペギー・メイ。ヴァラドン中学三年生」

真っ先に名乗ったのはしきりと文句を言っていた少女だった。

髪の毛を二つに分けてそれぞれの耳の上で結び、人工的に巻いて垂らしている。短いスカートの足は剝き出しでサンダルを履いている。とてもこれから林間学校に出向くとは思えない格好だった。

続いてちょっと野暮ったい感じの、おどおどした少女が名乗った。

「あの……アリスンです。あたしもヴァラドン中の三年生です」

残る二人の少女はプリシラとティナ。

さっきペギー・メイをなだめたのがプリシラだ。

不満たらたらのペギー・メイに対し、にこにこと人好きのする笑顔を浮かべている。
ティナのほうはそこまでお人好しではないようで、何やら困ったような眼でペギー・メイを見ているが、中心人物のペギー・メイに逆らう気はないらしい。
プリシラは小柄で、ややぽっちゃりした体つき、ティナは背丈は同じくらいで少し細い。
彼女たちもヴァラドン中学生で、ペギー・メイやアリスンと同じ学級だという。仲良し四人組だ。
少年たちのうち、年上に見える一人が言った。
「それじゃあ同学年だ。ぼくはチャック。ミーガン中学の三年」
「トビーだよ。フォリチェリ中学一年」
チャックは顔立ちも服装も品がよく、洗練された雰囲気で、見るからに優等生の少年だ。
トビーも勉強はできそうだが、野外活動は苦手で、一日中端末の前に座っているような感じだった。
リィたちもそれぞれ名乗り、十二人は早速、送迎艇に向かった。
ペギー・メイは二泊三日の旅行にしては大げさな、自分の胸ほども高さのある旅行鞄を持っていた。
正確には横に立たせて引いていたのだが、それを見たカーターが苦笑しながら言った。
「その荷物は船に置いていくしかないでしょうね。送迎艇が現地に到着してから実際のキャンプ場まで皆さんには自分の足で山道を歩いてもらいますから。とてもそんなものを連れてはいけませんよ」
ペギー・メイはすかさず眉を吊り上げた。
「聞いてないわよ、何それ！」
「荷物は自分で持ち運べる分だけと事前に通達してあるはずです。この場合の『持ち運ぶ』というのは自分の力で抱えたり背負ったりして運ぶことですよ。転がしていくという意味ではありません」
「駄目よ。必要なものばっかりなのよ。減らしたりできないわ」
「では、後でどんなものが入っているのか調べます。

他の皆さんもです。現地に不要と判断されるものは船内に置いていってもらいます」
　カーターは困ったように苦笑して言った。
「今のうちに言っておきますが、特に女の子の場合、不要品を持ち込むことが多いんですよ。化粧品とか髪を巻く道具とか、もっと極端な例では下着や服を洗って乾燥させるドライヤー等ですが、林間学校にそうしたものは必要ありません」
　ペギー・メイは完全なふくれっ面になった。
　指摘されたものを全部持ってきたらしい。
「……やってられない。そんなこと言われるんなら、帰るわ、あたし」
　本職の添乗員なら大慌てで客をなだめる所だが、カーターは連邦大学から生徒の案内を任されている職員に過ぎない。至ってにこやかに言った。
「はい。お取り消しですね。結構です。その場合、この学習に関する単位はさしあげられませんので、他の体験学習を受講してください」
　ペギー・メイはむっつりと黙り込んだ。
　不機嫌を絵に描いたような顔つきだったが、もう帰るとは言わなかった。
　どうやら、どうしてもこの単位が必要らしいが、文句を言うのは忘れなかった。
「だからいやなのよ。林間学校なんて。虫は多いし、草は汚いし、ちゃんとしたお風呂もないし……」
　さすがにティナが眉をひそめて友人をたしなめた。
「よしなよ、ペギー・メイ。みっともないよ……」
　幸い、このわがままな少女もみっともないという感覚は理解できたらしい。
　リィとシェラ、さらにジェームスとハンスが眼を丸くして自分を見つめているのに気づいて、つんと頭をそらした。
　フランクが笑いながらファビエンヌに訊く。
「山の中で化粧なんかするのかよ？」
「基礎化粧品ならあたしも使うわよ。口紅や睫墨（マスカラ）は意味ないから持ってきてないけど」

唇を濡れたように光らせ、睫を長く見せるために黒く染めているペギー・メイに対する皮肉だったが、ペギー・メイは眼を剝いて言い返した。
「信じられない。お化粧もしないで外へ出るなんて、それこそみっともないわよ」
ファビエンヌが呆れて言った。
「あなたねえ。そんなに林間学校がいやなら、他の体験学習を選べばよかったでしょう」
「短期間で済むのはもうこれしかなかったの！」
まあまあと、プリシラとティナが割って入る。
すったもんだの末に彼らは送迎艇に乗り込んだ。
その送迎艇を収容し、彼らを乗せて出発したのは三万トン級外洋型宇宙船《ロビンソン》。
目的地の惑星ヴェロニカまでは約四百七十光年。
出発時刻は標準時十八時二十分。到着予定時刻は二日後の七時だから、およそ一日半の航海である。
《ロビンソン》の乗組員はバックス船長とネヴィル操縦士の二人だけだった。
この等級の船なら一人でも動かせるが、念のため二人が搭乗しているということらしい。
バックス船長は四十代の半ば、ネヴィル操縦士は三十そこそこだろう。
最初に搭乗した十二人に自己紹介した後、二人はずっと操縦室に籠もっていた。
ジェームスは操縦課程を専攻していることもあり、内線で操縦室に話しかけて、熱心に訴えた。
「ぼくはヴェルナールに通ってるんです。操縦室を見学させてもらえませんか？」
内線の向こうでバックス船長は笑って言った。
「勉強熱心は大いに結構だが、見学は認められない。生徒を操縦室に入れてはならない規則なんでね」
「ちょっと見るだけでいいんですけど……」
「駄目だな。この操縦室は見学には対応していない。第一、今回の講習は林間学校が目的だろう。操縦に興味があるなら後日あらためてそうした体験学習に参加するといい」

船長の言い分は至極もっともなものだった。
リィも不思議に思って尋ねていた。
「ジェームスは、なんでこの体験学習を選んだんだ。宇宙船の製造工程の見学とか、宇宙生活の体験とか、得意そうな講習だっていろいろあるのに」
「そりゃあそうだけど、そういう講習ばっかりだと偏りが出るからさ。成績にも影響するんだぞ」
二人の会話を聞きつけたハンスが頷いた。
「そうだな。少なくとも中学生のうちは、技術系と自然科学系をバランスよく取ったほうがいい」
リィは驚いた顔になった。
「じゃあ、おれたちも一つは技術系の講習を取ったほうがいいってことか？」
「一つどころか、二つか三つは取っておいたほうがいいと思うね」
要するに、自分の得意な科目ばかり選んでいると、あまり高い評価はもらえないということだ。
シェラが苦笑しながら頷いた。
「やっぱり、それほど甘くはありませんね……」
「進級できるなら、おれは別にかまわないけどな」
成績はどうでも――とはさすがに口に出すことを控えたリィだった。
自動機械のつくった簡単な夕食の後、カーターは全員を集めて今回の体験学習に関する説明を行った。
「――皆さんがこれから向かうのは惑星ヴェロニカ。この星は一言で言うと巨大な宗教国家です。住民のほとんどがヴェロニカ教の信者で、ヴェロニカ人といえばヴェロニカ教徒と思って間違いありません」
ファビエンヌが頷いて、独り言のように言った。
「ヴェロニカの文化には前から興味があったのよ。自分で体験できるいい機会だから」
リィが不思議そうに尋ねた。
「そんなに珍しい宗教なのか？」
「あなた、何も知らないで参加を申し込んだの」
「山の中で自炊っていうだけで充分だったんだけど、違うのか？」

問いかけの眼でカーターを見ると、リィの疑問に答えるように笑って頷いた。
「我々外国の人間にとって一番わかりやすい特徴と言えば、ヴェロニカ教の極端な食事制限でしょうね。彼らは生涯を通じて獣肉、魚肉を口にすることを厳しく慎んでいます。油などの動物性成分もです」
リィが眼を剝いた。
「向こうでは肉も魚も食べられないってことか？」
「現地住人はそうです。でも、外国人なら別ですよ。皆さんのためにもちゃんと肉類が用意されてます」
「そりゃあよかった」
本気で胸を撫で下ろしたリィだった。
シェラも興味を持ったようで質問した。
「惑星全体が菜食主義の国なんですか？」
答えたのはファビエンヌだった。
「それもただの菜食主義じゃない。ヴェロニカ教が普通の菜食主義と違うのは、自生植物も摂取しちゃいけないってところよ」
「つまり……野いちごとか、野草の類とか？」
「きのこ類とかもね。食べられないわ」
「いったい何を食べてるんだ？」
「人の手で栽培して収穫した植物類――それだけよ。天然自然の植物も果物も戒律に触れるんですって。例外として蜂蜜は許されていたと思うけど、それもヴェロニカ政府認証の蜂蜜でないといけないそうよ」
リィはますます眼を丸くして、シェラはますます不思議そうに首を捻った。
「ですけど……大人はともかく、小さなお子さんはそれで栄養が足りるんでしょうか」
「同感だ。それに、母乳はどうなんだ。あれだって立派な動物性油脂だぞ」
天使のような少年の口から『母乳』という言葉が出るのはかなり奇異な眺めである。
「そこまでは知らないけど……」
ファビエンヌも曖昧に視線をさまよわせていた。

「寮にね、ヴェロニカ出身の知り合いがいるのよ。女の子。まだ中学生だけど徹底してるの。宗教上の理由ってことで、食堂でも一人だけ別の献立なのよ。食材は全部ヴェロニカから送られてくるんだって」
「それがみんな野菜なのか？」
「本当にそれ以外のものは食べないんですか？」
「食べないわ、絶対。だから遊びにも誘えないって、同学年の子が言ってた。外食ができないんだもの」
「どうしてだ。肉や魚を注文しなければ……」
　問題はないんじゃないか――というリィの疑問に、ファビエンヌは苦笑して肩をすくめた。
「おおありよ。肉や魚だけじゃない。化学調味料、合成甘味料、人工着色料も駄目なんだから。普通の喫茶店やレストランの献立にそれらが入っているかどうかなんて、いちいち確認できないでしょ」
　緑の瞳と紫の瞳が揃ってまん丸になる。
「徹底してますねえ……」
「志（こころざし）としては立派だけど……このご時世でその食生活を貫くのは、ものすごく大変なんじゃないか。留学するのも一苦労だ」
「そうですよ。その子だってまだ中学生でしょう。育ち盛りですのに……肉類をまったく食べないで、健康な身体に育つんでしょうか？」
「うん。大人はともかく、子どもは普通に考えれば栄養失調になるわよね。それを補うためだろうけど、ヴェロニカの品種改良技術は相当なものらしいわ」
　子どもの成長に三大栄養素が必要だということは常識である。植物だけで、肉類に劣らないタンパク質と脂質を摂取しなくてはならないのだ。さぞかし栄養価を重視した野菜が栽培されているのだろう。
「だけど今回の講習は……栽培現場に立ち合うとか、そういうものじゃないんだろう？」
　ファビエンヌはこの問いの答えを、カーターへの質問という形で示した。
「わたしは外国人向けの食料ではなく、現地の人と同じものを食べたいんですが、希望できますか」

「もちろんです――他に希望者はいますか？」
どこからも手は上がらなかった。
翌日の夕食後、カーターは生徒たちに今回の体験学習の説明をした。
明日の朝には《ロビンソン》は惑星ヴェロニカの領海に入る。
宇宙船が惑星ヴェロニカの軌道上に到着したら、生徒たちは送迎艇で地上に降りる。
だがそれは、宇宙港ではなく、飛行場ですらなく、ただの野原の空き地に降りるというのだ。
そこからキャンプ場まで徒歩で行くのだという。
「歩くっていうけど、どのくらい？」
「そうですねえ。ざっと六キロメートルですね」
「六キロ！」
ペギー・メイばかりでなく、女の子たちが一斉に声を上げた。
驚いたのは少年たちも同様である。
中でもトビーは眼鏡の奥の眼を丸くして呟いた。
「そんなに歩けるかなあ……」
フランクが呆れたように訊く。
「どうして最初からキャンプ場に降りないんだ？」
「到着予定時間は船内時間では早朝ですが、現地は昼過ぎなんです。皆さんは起きてから八時間後には再び就寝時間を迎えるわけですから。少しは歩いて身体を疲れさせませんと、とても眠れませんよ」
カーターは地図を表示して説明を続けている。
「皆さんが滞在するキャンプ場はここ――タザ州の自然保護区内にあるカスパチオ山の山腹にあります。カスパチオ山は標高八百九十四メートル。送迎艇は山には降りられませんからね。麓に着陸します」
「それにしたって、そこから六キロも歩くのか？大人の足でも一時間半はかかるぜ」
「いいや、そんな計算通りにはいかないと思うな。途中からは山道だし、中学生の女の子もいるんだ。三時間はかかるんじゃないか」
フランクとハンスがそれぞれ感想を述べる。

カーターは笑顔で話を締めくくった。
「山腹と言っても、かなり麓に近いところですから。それほど大変な行程ではありません。ハイキングと思ってくださってかまいません。ただし、皆さんが参加しているのは観光旅行ではなく、あくまで体験学習なんです。ある程度臨機応変に対処することが皆さんには求められます。ですから歩きやすい靴で出発したほうがいいでしょうね。舗装されていない道をサンダルで歩くのは大変ですよ。しかもかなり長い距離ですからね」
「……長いのか？」
リィが呟いた。六キロのどこが長いのだろうかと訝しむ口調だった。
幸い、この呟きは人に聞かれずに済んだ。
「それから、今夜はなるべく水分を控えてください。途中にトイレはありませんからね」
説明を終えると、カーターは全員の荷物を調べて、不要なものを没収した。
ペギー・メイの荷物は半分以下――それどころか三分の一以下になった。
着替えと称して持ち込んだ衣裳のほとんどが林間学校にはふさわしくないものだったからである。
他にもトビーがゲーム機を没収された。
「こういうものに時間を費やしたのでは体験学習に行く意味がありませんから。ちゃんとお預かりして、講習後にお返しします。――明日は早いですから、皆さん今日は早めに休んでくださいね」
翌日、彼らは船内時間の早朝五時に眼を覚まし、朝食を食べながら、船が到着するのを待った。
朝食後にカーターはあらためて荷物検査を行った。
船内では許されていた菓子類の類も、地上に持ち込むことはできないというのである。
自炊が目的なのだから、当然といえば当然だが、十代半ばの少年少女たちは甘いものが好きと相場が決まっている。
露骨にいやな顔をした少女たちをなだめるように、

カーターは言った。
「今回のキャンプではお菓子もつくるはずですから。ぜひ自然の味を味わってみてください」
逆に水分はくれぐれも忘れず持っていくようにと念を押した。六キロも歩くのだ。
ただし、人工甘味料を使ったものは不可だという。要するに、持っていけるものは、ただの水だ。
ジェームスがふざけて言ったものだ。
「これって、早いところキャンプ場まで行かないと飢え死にするな」
《ロビンソン》は定刻通りにヴェロニカの軌道上に到着した。
この時ばかりは宇宙船の乗客はみんな同じ行動を取る。
これから自分たちが着陸する星の姿に見入るのだ。
ヴェロニカは美しい星だった。
海の部分に陽光が当たり、青く輝いている。
生徒たちが乗り込んだ送迎艇は船長のバックスが操縦した。
送迎艇が地上に降りる間も、着陸の様子は船内の端末画面にずっと映し出されていた。
宇宙空間から大気圏に突入する時、画面が消えて、やがて真っ青な空と遥か下の大地が大写しになる。
みるみる地上が近づいてくる。
ほとんど衝撃もなく着陸すると、バックス船長が笑いながら客室の生徒たちに話しかけてきた。
「ヴェロニカに到着だ、諸君。——いい旅を」
「行ってきます」
生徒たちも笑って言葉を返し、席を立った。
送迎艇を出て二日ぶりに外の空気を嗅いだリィは大きく深呼吸したのである。
「空気がうまいな」
「ええ」
シェラも頷いた。二人には船内の空調より自然の空気のほうが遥かに心地いいものだった。
辺りを見渡すと、そこは本当に見事なくらい、た

だの野原だった。
陽射しは肌に暑いが、空気はひんやりと涼しく、空も高い。野原というより高原の雰囲気である。
送迎艇の降りた部分は剝き出しの土だが、周囲は深い草むらに覆われており、四方には山が見えた。
ペギー・メイとトビーは顔をしかめている。
「……やだ。変な臭いがする。何これ？」
「草の臭いだよ」
アリスンは相変わらずおどおどと辺りを見渡し、プリシラとティナは小鳥の鳴き声に喜んでいる。
最後に、カーターはフランクとハンスに非常用の通信機と緊急信号発信機を手渡した。
「一本道ですからね。道に迷うことはありえないと思いますが、万が一の時はこれを使ってください」
ファビエンヌが舌打ちした。
「あたしも最年長者なのに、こういう役目は男子と決まってるんだから。男女差別だわ」
「すみません。荷物になりますから。体力を考えて、最年長者の男子に預ける規則なんですよ」
「そうだよ。こんなもの、荷物が重くなるだけだぜ。そんなに持ちたいなら代わってやろうか」
「結構よ」
現地時間に時計を合わせて、彼らはキャンプ地を目指して出発した。その彼らの背後で送迎艇が空に浮かびあがる物音がした。
生徒たちは振り返って、飛び立っていく送迎艇に手を振って見送ると、再び前を向いて歩き出した。
最年長者のハンスとフランクが先頭に立って進み、後ろにファビエンヌ、ヴァラドン中の女の子たち、ジェームスとチャック、トビーの順番で続いていた。
リィとシェラは最後尾からついてくる。
カーターの言う一本道は二人が並んで歩ける幅で、舗装こそされていないが、見晴らしもよく、勾配も緩やかで、のんびりと足を進められるハイキング・コースのようだった。
その足下を踏みしめて、リィは思わず呟いた。

「……妙だな？」
リィは最後尾にいたので、この呟きは他の子には聞こえなかった。
舗装されていない道は、慣れない女の子たちには歩きにくいらしく、歩調はなかなか上がらない。
十八歳のハンスやフランクにとっては焦れったい歩みである。
フランクは何度も後ろを振り返り、女の子たちを叱咤した。
「急げよ。キャンプ場に着く前に陽が暮れるぞ」
ファビエンヌがそんなフランクに文句を言う。
「無茶言わないの。相手は女の子よ」
「こんな時だけ女の子を主張するなよ」
「仕方ないじゃない。体力的に女の子が男の子より劣るのは当然でしょ」
「女の言う男女同権って、ほんっとに女に都合よくできてるよな」
「何ですって？」
「二人とも。出発したばかりで喧嘩はよしなよ」
ハンスが苦笑しながら二人の間に割って入った。
「ファビエンヌ。フランクの言うことにも一理ある。暗くなる前にキャンプ場に着きたいからね」
「ええ、わかってる。あたしはジムで鍛えてるから、このくらいは平気だけど……」
着替えの入ったリュックサックを背負い直すと、ファビエンヌは眉をひそめて後続を振り返った。
覚束ない足取りで、息を切らしながらついてくる少女たちは明らかに日頃の運動不足が窺える。
「あたしが最後尾につこうか？」
「いや……」
ハンスは首を振って、列の一番後ろに眼をやった。
「あの二人なら大丈夫だ。ぼくたちは先を急ごう」
再び歩き出しながらファビエンヌは興味を持った様子で尋ねた。
「あなた、あの子たちと寮で一緒なんでしょう？」
「ああ、一応、寮長をやってる」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。